

# 大博物館



津山郷土博物館

だより



高田城下町絵図（部分） 本館蔵

凡例：向かって右が北、青色～河川・濠、黒色～土塁、赤色～道筋、黄色～町人町、  
武家屋敷地・寺社敷地は無着色

越後高田（現・新潟県上越市）は北陸枢要の地で、徳川家康の六男・松平忠輝が封ぜられて以来、酒井・越前松平・稲葉・戸田・久松松平・榊原と、代々家門・譜代の大名が置かれた。築城は慶長19年（1614）幕府の国役普請による。城は何重もの濠と広い武家屋敷地で囲まれ、その西側を通る北国街道及び北方で分岐する奥州街道に沿って町人町が細長く伸び、城下の西端には街道に平行して寺院が並ぶ。

武家屋敷地には小栗美作・荻田主馬・永見大蔵など松平光長の重臣の名が見られ、越後高田を領した時代の資料の一つとして津山松平藩に伝わった絵図

であろう。また、この地は寛文5年（1665）の大震災で壊滅的な被害を受け、その後の復興で町割りが一部改変されるが、この絵図にも復興後の町割りが示されており、寛文5～延宝末年（1665～81）頃の高田城下を描いたものとわかる。ただし、作成年代などの注記は見られないので、後世の写しの可能性もある。光長改易後はいずれも10万石前後の小藩で、城下に水田が出現したというから、この絵図には城下町高田の最盛期が記録されていると言える。

## はじめに

江戸時代、徳川将軍家は芝の増上寺や上野の寛永寺を菩提寺と定め、それぞれ浄土宗・天台宗の関東もしくは全国の総本山に位置付け、自己の宗教的な権威付けにも利用していた。

各大家名においても、城下またはその近郊に菩提寺を置き、他を上回る寺領や寄付米を施すなどして、領内で別格の地位を与えている。しかし大家名には改易や転封があり、そのために手厚い保護を受けられなくなる場合がある。津山松平家の場合、国元では城下寺町の泰安寺、江戸においては天徳寺などを菩提寺と定めていたが、越後時代の菩提寺であった高田城下の長恩寺（現・天崇寺）にも若干の寄付を施していた。

本稿では愛山文庫中の史料を基にして、長恩寺の転変をたどり、転封後に取り残されて大家名との直接の結び付きを失った菩提寺の一例を紹介する。

## 長恩寺の略歴

右の表の通り、光長が高田を領した時期には、寺領以外にも多くの供養米が与えられている。当時の境内には、本堂や鐘楼・庫裡などの外に東照宮や松平家の霊屋・廟塔が建ち並び、大家名の菩提寺にふさわしい威容を誇っていた。それが、榊原家が入封するに至ると寄付を拒まれてしまう。再興されて津山を領する松平家からの寄付は年間銀3～5枚のみで、領知半減後の松平家には建物の修理費を出せる余裕もなく、施設の破損が進行した。寺は何度か勸化を実施して修復資金の確保を図ったが思うようには集まらなかった。そればかりか、火災や地震などの災難に見舞われ、最終的には松平家に頼るしかなかった。

文化14年（1817）10万石に復帰したとは言え、松平家も長恩寺の期待に応えるだけの財政的余裕はなかったようである。そのため、長恩寺もやむなく借金によって応急修理を行い、後から費用を請求するという苦肉の策を取っている。万延元年以降の史料が残っていないのだが、応急修理を終えるか否かという状態で明治維新を迎えたものと思われる。

## 長恩寺の困窮

越後を離れた松平家が、なぜ長恩寺を領内に移転せず、若干の寄付を施すにとどめたか、恐らくは単なる転封ではなく改易によって高田を去り、再興後も越後時代の半分にも満たぬ知行高であったことによるやむを得ない措置であったと考えられる。

長恩寺から出された修理願には、当地での檀家はわずかに16軒でいずれも困窮しており、寺領からの収入と松平家の寄付の他、増上寺に預けた祠堂金くらいしかまとまった収入はないと、苦しい事情が明かされている。それでも、寺檀の関係が存続し、現に霊廟や位牌が残されている以上、長恩寺としても祭祀・供養を中断する訳にはいかず、年回法要や毎月の忌日供養は欠かさず実施しているとも申し添えている。

さらに当時の荒廃ぶりについて、祀られている諸霊に申し訳ないだけでなく、近国にも廟所の存在が知られているので外間にもかかわると述べている。大家名が菩提寺を手厚く保護し、壮麗な霊廟を建立したのは、単に祖先の供養のみに留まるものではなく、自己の権力を誇示し、さらに権威を高める意図によるものと考えられるが、それだけにその後の維持管理に支障を来すと、権威失墜に結び付きかねない。そのことを暗に指摘して、何とか松平家の援助を引き出そうとしているのである。

## むすび

江戸時代も後期になると、幕府・諸藩とも財政事情が悪化し、様々な改革を試みるが、寺社の修復資金を捻出する手段としては、幕府の御免富をはじめとする富くじの実施を挙げることができる。長恩寺の場合も、天保3年（1832）松平家に伺いを立てたうえで江戸での富興行を幕府に出願して許可され、翌年正月から同6年11月まで実施している。折あしく飢饉が起きたために不振であったというのが、いずれにせよ菩提寺をはじめ幕藩権力が保護してきた寺社に対して、かつてのような出費が出来なくなってきた事情が富くじ実施の背景にある。そういう意味では、この松平家と長恩寺の事例は、やがて崩壊する幕藩体制とその保護を受けていたが故に影響をものに受けた寺院との関係を象徴するものと言える。

（小島 徹）





## Information

### 博物館からのお知らせ

つやま まんにんこう

#### 平成11年度特別展 富くじと津山万人講

##### ●平成11年10月9日(土)～11月14日(日)

津山万人講とは、江戸時代後期に有力町人などが講元となって盛んに行われた富くじの一種です。その収入の一部が藩庫に入るため、津山藩でも風紀の乱れを懸念しつつも、一方では奨励するという複雑な対応をとっています。本展では万人講の仕組みや変遷を明らかにしながら、津山城下町の発展していく様子を明らかにしていきます。

主な展示資料

ひびる・木駒・万人講取計書・上り札文句帳・追廻し富場平面図・万人講群集の図・町奉行日記など



### 『弥生土器をつくる』 参加者募集中!

今夏も小学生を対象に、夏休み子供歴史教室を実施します。これは、弥生時代の土器づくりの方法を学習しながら、実際に土器をつくってみるものです。まず、粘土で土器の形をつくり、約3週間乾燥させた後に、それを野焼きで焼いて出来上がりです。参加希望者は参加費を添え、7月18日までに博物館までお申し込みください。

●日 時/平成11年7月22日(木)・23日(金)、  
8月17日(火) 3日間(ただし8/17  
は雨の場合順延) 午後1時から4時まで

●参加対象/小学生5・6年生

●場 所/津山郷土博物館2階研修室他

●定 員/30人

●参加費/300円(材料費)

### 「第43回美作の文化財めぐり

#### —山陽道美作支路を歩く—を実施しました!

##### ●平成11年5月16日(日) 津山市内 参加者40人

山陽道美作支路とは播磨国府から美作国府に至る古代官道のことですが、今回は美作国府に達するその最終ルートを復元しながら歩きました。午前10時に美作大崎駅に集合した一行は、美作国分寺跡や飯塚古墳を経て、今も残る直線道路の跡をたどりながら、国府までの約12kmの道のりを踏査しました。薄曇りでやや暑い日和でしたが、この道を行き来したと思われる往時の国司に想像をたくましくしながら、わいわいがやがやと歩いた一日でした。



### 館内の燻蒸を

#### 実施しました!

##### ●平成11年6月13日～6月17日

去る6月13日から17日まで、館内の全展示室・収蔵庫の燻蒸を実施しました。これは、あらかじめ各部屋を密閉したうえ、有毒ガスを24時間浸透させたのち、濃度を薄めながら徐々にガスを抜き去る作業です。非常に危険な作業ですので、県外の専門業者に委託して慎重におこなわれました。これによって、室内にいる虫や細菌を殺し、資料の劣化を防止します。大切な博物館資料の保存のため、なくてはならない作業で、毎年この頃を実施しています。



### 前号の「博物館だより」に誤りがありました!

「博物館だより」No.22の行事予定欄の日時に誤りがありましたので、次のとおり訂正します。

行事名	正	誤
企画展 津山藩の教育	3/11	3/12
正倉院文書を読む	1/13・2/10・3/9	1/8・2/13・3/12
森家先代実録を読む V	1/27・2/24・3/23	1/22・2/26・3/26
美作の文化財めぐり	3/5	3/8



### 博物館入館案内

- 開館時間: 午前9:00～午後5:00
- 休館日: 毎週月曜日・祝日の翌日  
12月27日～1月4日・その他
- 入館料: 小・中学生 100円(80円)  
高校・大学生 150円(120円)  
一般 210円(160円)  
※( )は30人以上の団体

### 博物館だより No.23 平成11年7月1日発行

編集・発行: 津山郷土博物館  
〒708-0022 岡山県津山市山下92  
☎(0868)22-4567 ☎(0868)23-9874  
印刷: 株廣陽本社

● 津山松平藩の検印で剣大といひ、現在津山市の市章となっている。